

# 町医者だより

平成26年03月号

## 肺炎球菌ワクチンをめぐる話題

〈発行・お問合せ先〉

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

ヤソポ 本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポー改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話047-379-6661

おおわだ  
内科  
呼吸器科

これまでの小児の肺炎球菌ワクチンに続いて、今年の秋から水ぼうそうとともに成人用肺炎球菌ワクチンの定期接種化が始まることになりました、この2つのワクチンの定期接種化に年間300億円程度の予算を厚生労働省は見込んでいるようです。今月は肺炎球菌ワクチンをめぐる話題です。

### 成人用肺炎球菌ワクチン

実は20年以上前からあって、1992年からわが国では使用しているワクチンです。これまでも呼吸器疾患を持っている患者さんには65歳になったら接種した方が良いですよとお勧めしてきました。どうしてかいうと、そう教えられてきたからです。このワクチンの問題点は、このワクチンが「肺炎予防」のワクチンではないのに、メーカーも呼吸器学会もあえてその事をはっきり言わないところです。このワクチンはあくまでも肺炎球菌という菌に対するワクチンです。このワクチンの有効性に関しては、敗血症（菌が血液中に存在する）や髄膜炎（菌が髄液に存在する）といった侵襲性肺炎球菌疾患に有効なことは明らかですが、肺炎球菌による肺炎を防ぐかは議論の多いところです。複数の臨床研究データを解析し厳しく評価することで知られているコクラン・データベース・システミックレビューの2013年1月31日号にも、収入の少ない国ではこのワクチンは肺炎を予防するが、収入の高い国では「肺炎予防効果はない」とはっきり明言しています。このことはおそらく10年以上前から良識ある呼吸器科医なら認識していることです。それではなぜ、この期に及んで定期接種化に踏み切ったのか？答えは恐らく簡単な理由です。ヨーロッパやアメリカではすでに定期接種化されているからです。

### 小児用肺炎球菌ワクチン

小児用の肺炎球菌ワクチンは成人用とはまったく異なる製剤です。アメリカでは2000年から子供さんに対して定期接種化されていますが、ニューイングランド医学雑誌に定期接種化10年目に小児用肺炎球菌接種が肺炎での入院を減少したか報告されています（NEJM 2013年7月11日号）。それによると、小児用肺炎球菌ワクチンの導入後すぐに、2歳以下の乳幼児ですべての肺炎の入院が減少し、さらに驚くべきことに75歳以上、特に85歳以上の高齢者においても全ての肺炎入院数が減少したことを明らかにしています。ただし、2歳から74歳までの年齢層に関してはワクチンの効果が目立ちませんでした。が、これはすばらしい結果です。本当でしょうか？まず、ワクチン接種対象小児の何パーセントがこの肺炎球菌ワクチンを接種したのかが書いていません。また、この報告にあります、入院の原因として「肺炎球菌」が関与した割合がワクチン接種が開始された2000年以前でも多くて8.4%で、2歳未満では2.2%しかありません。たって2%しかいない感染症に対するワクチンが、統計学に明らかに全ての細菌性肺炎による入院の減少をもたらせるものなのでしょうか？まして、ワクチン接種対象者でもない85歳以上の肺炎入院を減らせるものなのでしょうか？大いに疑問です。小児用肺炎球菌ワクチンが成人用と大きく異なるのは、小児用は免疫賦活剤（アジュバント）が含まれている点です。この安全性がまだ確信ができないため、当院では、接種の手を上げられないでいます。